

「葦」第 35 号発刊によせて

教育委員長

竹 下 京 子

拡大する医療の現場で求められる看護の専門性は高く、期待も大きい。それ故に看護師一人一人の看護実践は、科学的根拠に基づいた看護を提供し、看護に責任が伴っていることを自覚しながら行動しなければなりません。

看護部の組織一員として、安全・安心・丁寧な看護を提供するためにそれぞれ個人の役割を達成するために目標設定し活動してきています。

平成 15 年度のねらいは「学びを生かして実践に役立てる」をもとに教育委員会活動を行いました。

今年度は「看護診断」に焦点を絞り、平成 12 年に引き続き計画し、「看護診断の概論・総論」全員が受講できるように 2 日間講演を開催した。さらに記録委員会と共に、所属でリーダーシップを発揮する者を育成することを目的に、2 回の事例検討を通して看護診断のプロセスを学び、所属で課題を計画し浸透を図るよう役割を任せましたが、所属でバラツキがみられ、まだ十分に浸透していないのが現状です。これらを踏まえ引き続き継続教育として計画して行きたいと思います。

また患者の代弁者として看護を展開するために、接遇の視点から、日頃の看護を振り返り気づきをと「患者の心に寄り聴き方・話し方」はコミュニケーション技術の重要性を再認識できたと考えます。

看護研究は年々成果が見え、院外に発表できる件数も増加してきていることから一定の評価と考えます。

現在、組織の厳しい現状の中で、経済性・効率性を考えながら看護の質を高めるために、看護師は、日常生活援助を通して看護の専門性を発揮し、問題意識・状況判断能力・アセスメント能力を磨き、看護実践能力を高めるための開発・キャリア開発の体制づくりを早急に考えていかなければならない時期にきています。それに伴い教育委員会の役割も変化していなければならぬと考えています。

課題はいろいろありますが、この 1 年間いろいろご協力いただいた皆様に深く感謝致します。